

ここはあまりに白い山なので、ふみしめても
ふみしめても沈まない月が

湖に反射している

もみの木が揺れ、途切れ

わたしの代わりに生きてゆこうとする

毎日起きて、食べて、排泄をして
かたちばかりの義務をこなして
寝ることに飽きていたわたしは
もみの木になってみることにした

ことばでいうのは簡単だったが
もみの木のからだになるのは
たやすいことではなかった
皮にくるまれて
息がくるしい
技を伝授してくれなかったから
幹のわりに葉っぱがたくさんだから

視界のすみで
かつてわたしだったものが
きちよきちよりと遠ざかってゆくのを
血まなこのようなもので捉える
背中にもみの葉を生やして
慣れないからだを揺らして
落葉は白さに覆われて

もっとうまく歩けるだろうと

言おうとしたときにはもう息が
できるようになっていて

もみの木だと思っていたものは
湖で割れた氷の板で

白さにぬかるんだ足を

抜きながら進むわたしの肩は

なんだかともうれしそうだった

今日はゴミの日
だったと覚える
しかし見送り 布団にもぐる 雨だし
むし暑さの奥地に 聞こえてきた
なり響くもの それを 天満宮のお隣の
この団地の住人の多くの お年寄りが
道真公は未だやりきれんのだろう
と説明する
が
そう説明するお年寄りたちの 目玉が
ぐしぐし 潰れていく
迷信というには かるく
嘘というには 根深くて
流石にベランダの吸い殻くらい片付けておくべき
だったかな と俺は起き上がる明日は 土曜だし
YouTube の自動再生が イタリアの歌かけてたし
オソレミヨ、オソレミヨ
このカーテンは母が
やっと見つけた
この窓枠に合う規格
オソレミヨ、オソレミヨ
その車輪は三階の俺に
やっとハブを覗かせ
団地の路地を転がっていた
さあ俺はみた、
大車輪は木製だ、
その木製の大車輪が、転がる路地は、

明らかな計画のもとに作られているんだろう、
歩きながらいつもそう思っていた、

路地を、

大車輪は転がって、

けっきょく、森と林の違いがわからないまま義務教育終わっちゃった、とわらった工場勤務の女の子とか、

どうやら、父が不幸せなのはあながち僕だけのせいでもないらしい、と気づいた受験期間近の男の子とか、

ふと、便りがなければ頼りもないという詩句を思いついてしかし、そのまま胸にしまい込んだ深夜レジ打ちのおっちゃんとか、

そろそろさすがにこの人生、なにかが巡ってもいいはずだ、いいはずだ、いいはずだ、と繰り返すひととか、それら

それらのひとびとの足跡を、路地を転がる大車輪が、彼らのひいた途切れそうな線と、計画された路地を、掠めるような線を、木製の大車輪が、

踏み潰すところ、

塗り潰すところ、

無視するところを、俺はみた、

ベランダからみた、今宵みた、

ちよつと寒がりながら、みた、

踏み潰されてた、

きつとみた、

みたんだ

俺は

自転車に乗れる ようになるのに人より

時間がかかった 父は 諦めるのが早い

んだあんなはと言うが 俺が諦めるより

父が俺を諦める方が早かった と今では

思う

俺は

自分が漕いでいる自転車の車輪を見よう
としていつも バランスを崩すのだった

車輪を覗きたがるのは 俺の生来の悪癖
で 父の運転する車の車輪も 窓を開け
て覗きたがるものだから 助手席の母は
俺の隣の 後部座席に移動せざるを得な
かった それを申し訳なく思う 今では
思う

俺が

当時に 思っていたのは リアガラスに
映る 太陽が 俺たちを 俺たちの車を
追いかけてるように見えた ってこと だ

月が 出た

この宵 今宵

転がっていた 大車輪

その上に乗ってたのは

元右大臣 菅原道真 だったかもしれないし
一輪車さえ乗りこなした うちの妹 かもね

今度は俺が 車輪に覗かれる番だって

思いつく前に 車輪は通り過ぎてった

隣の部屋の

ぐしぐし目玉のお年寄りに あくるひ

このこと話すと 野菜たっぷりカレーをば

その宵の鍋に わけいれ くれた

ちよっと申し訳なくて

芯までしっかり煮えてて

ホラってなかなか、難しいもんだ

オーソレミーオ、オソレミヨ

少し

河野志帆

少しは役に立つがらくた

放棄した自転車がしんと伸びている

十年と十日

メッキは剥がされて金属は錆びついて

待ち構えていた森の入り口で

旺盛な蔦に絡んでいる

周りの空気と均一になるように

薄く広がって透過して

とける準備はできているけれど

捨てたことを覚えている限りは

消えたりしないものだ

と横切って

まばたいてシャッターを切る

一日毎に繰り返す

わたしはわたしの肉体として

生きて動くことを確かめる

肉体は精神より

すこしはやくに

少し早くに発つらしい

街の中でも森の中でも

似姿を探すのが普通になって

さよならを言わず発ったあなたに

やっと会えたけれど

代わりに長い時間を過ごしていた

あの子にはとても及ばない

道を歩くひと歩くひとの顔を覗き込む

会はずもないとおくの場所に行っても

特徴がなく同じひとはたくさんいる

どの場所も少し早くに発つ
期待をしてかける声というものは
出した途端真下に落ちていたり
逆に頭を突き抜けてしまったりする
ちょうど相手のいる地点
ちょうど相手のいる高さに
差し出せるように息を吸う
油絵の匂いに眉をひそめる
ひとかたまりの声は
ごぼごぼと喉からこぼれていつて
引き出しにしまわれている
スベアの眼鏡と同じで
存在していることがだいじだと思ひこむ
吹き飛ばされても寡黙に鎮座して
書類をせき止めている
ブックエンドのおかげもあり
かろうじて部屋の崩壊は免れている
律儀にお役目を果たす
品々をおきさり
あの部屋とあの街とあの地球を抜けて
すこしはやくにたつように
裏周りするつもりだから
わたしその光線と同一になりそう

計算

ローレル・テイラー

しあわせこいこいやってこいって

猫のお腹に書かれている

わたしは猫のしっぽにハシを釣り合わせて

「釣り合う」の妙な味にクルクル考えてみる

魚が元々天秤の右側に釣られたとしたら

左側が魚に合わせたのはなんだろう

銀うろこに銀両

金うろこに金両

色合わせで私たちのモノを計る時代

米に貝殻

きびにからし

似たモノが似たモノと一緒につられる制度が

常識の時代

マンサ・ムーサのマリからのハッジだったら

右側に金

左側に塩

モクテスマのアステカの帝国だったら

右側にカカオ豆

左側にタマル

価値の感覚が時につれ

私たちはカミやプラスチックや空想で

モノの類似性を判断する

この猫の価値はなんだろう

右側に猫

左側に数年前のインド・レストランの記憶

それで天秤が平らになるだろうか

しあわせが実際に来たら

ハシが落ちたら

猫のお腹の柔らかい毛を触ったら
猫におそわれたら

そうになったら猫の価値が変わるか

右側に猫

左側に真

人が真に向き合って掴み取って

皿に置く傲慢は猫にはなかった

真の感覚を皮膚で感触して

神経に伝わってくる重さを計る

それから猫の手を手にとってスツと

塗られている背中を撫でてみる

真が粘土できているに違いない

水で濡らして体温で温めて

私たちが評価しているものを揉んでゆく

猫 しあわせ 現金 うまい食事

竹 安全 自我 柔らかいベッド

価値の柔軟性

手のひらに重くて涼しくて

目の前にツヤツヤ明るく反射する

猫の頭を接吻してみれば

自分の価値もこのしあわせと

天秤される事実を実感する

人間の価値を決めるはずがないのに

わけがないのに

計られるわたしはその監視されている違和感と

一緒にじっと座ってみる

わたしと猫とわたしの視界にいない何かと

お腹がぐーぐーなってくる

伝票が届く

三人前の食事が金魚のうろこ六〇枚

税込

石のように硬くなった猫が手を伸ばして

わたしに爪を貸してくれる

ヒリヒリする指でわたしはハシを持って
食べ始める

窓のない部屋で横になっている

頭が痛むのは本の余白だけがはっきり見えてしまうからで

窓のない部屋には大きな本棚が三つあるのだった

横並びのいちばん右の棚には大判のものを入れる

中にオレンジの表紙（素材はビニール）

タイトルはゴシック体の白抜きで

いつもよりずっと小さく見えるのが不思議だった

目を強くおさえる

視界が白っぽくなって手を離すと

やっぱり小さいままで

その小ささは相変わらずこたえるけれど

部屋からは出られない

頭の痛みが取れて日光を直視しても

反射的に涙が分泌されることもなくなるまでは

といっても私の目はすっかり乾燥しきっていて

もう粘膜とは呼べないようになっていた

それは例えば

サンショウウオだと思って抱き上げた生き物が

大きなトカゲだった時の感覚に似ていて

両手でつかみ上げた生き物にやけどをさせなくてすんだことに

安堵するけれど

土がこぼれるのが気になって

手を放したくなった

それと同じように頭に触る

髪も湿っているし

指の先にも水滴がある

体のどこにも乾燥がないことを今なら信じられるかもしれない

じゃあ目が痛むのは？

と気になって

目を閉じて上下の瞼の境に爪で触れる

それでも見えてしまったものがちらついて

部屋の中の縮尺は相変わらずおかしくて

ほんとうは部屋から出ようとすれば出られたのかもしれないけれど

外が明るいのか暗いのかもわからなくなっていたのだった

思い切って立ち上がろうと思いつながら

すでにしゃがみこんだ後なのだった

自分の喋り方は

北九州弁というには角がなさすぎるし
熊本弁というには年数が足りなそうで
北熊弁だなんて言ってみてラーメンを
思い出したのは自分でもいただけない
と思いつつ小倉で食べた家系ラーメン
の脂っこくて飲み切れなかったスープ
の上澄には透明な層があってその下の
泥みたいな層とはきっぱり分かれてた
ことなんかもふと思い出した

地元を誇れないのは悲しいことだと思う反面、誇るところがないのが悪いよなと思う。毎年八月の初めにやる祭りはもう何年も嘘を続けてるし、中学の廊下には願書の書き方の隣に履歴書の書き方がでかかと貼ってあるような街だし、卒業式には警察が来るし、一番仲が良かったあいつは養育費に追われて人から二十万借りて連絡をしないし、そのくせ飯には誘ってくるし。今でも続いている友達は何人か俺に対してはまあいい奴なんだけど「お前さ、こっちにおる間はフリーなんやけんやり放題やん」って煙を吐きながらクラブに誘ってくるような奴でもある。俺は彼女を裏切りたくはないので最後まで付き合い切れはしないのだけれど、それに答えはしないのだけれど。そういう濁りは心が楽でたまにありがたい。地元と違ってこっちのいいところはいくらでも出るんだけどなって言ってみて、でもそれってこっちが地元じゃないってことじゃんって気づく。こっちの人が良い人ばかりな気がするのは多分みんな大学で出会ったから。「良い子」のあの子は会うたびに僕の胸ポケットから煙草を抜き取って本数を数えて少し悲しそうな顔をするし、クラブに誘われるときは大体好きなラッパーを見にいくためにナンパとかはしない。宅飲み終わりにおつまみ代の差額とかで小銭を置いていく奴はいるし、飲み代の割り勘で譲り合って逆に揉める。そういう関係はいつも正しくてたまに堅苦しい。

フィクショナル・イマジナリー・ミヤザキさん（イン・グリーンハイツ・井田）

牛島伸陽

細く小さな坂を上った先を右に曲がると、イマジナリー・グリーンハイツ・井田ここは生協管理物件

六畳間は本当に六畳間で、ベランダは備え付けの洗濯機だけ

風呂トイレは別じゃないので同じ、コンロは当然一口だけ

シンクは大きめの洗面器ぐらい小さくて、どうやって料理するんだろうって思う

近くにはいつも開いていない喫茶店、「コインランドリー」と書かれたコインランドリー

中学校や公民館や老人ホームがあるので朝は色々の声がしてかなり人の気配がある

ミヤザキさんはアレルギーがひどいので

ぴかぴかに晴れた日でも洗濯物は室内干しをするし、大抵は長袖の服を着ている

それとぼくはべつにすきなひとでもないから、という理由だそうで

ショーツもブラジャーもそのままに、物干し竿に無感動に二枚ずつ吊るしてあるので

どれにしようかな、とその日履く下着を選んでいる背中を見ることになる

ミヤザキさんは苗字の刺繍が入った高校のジャージの緑の短パンをよく部屋着にしてい

初めてここに来た時は上からスカートを履いて下から抜き取るように脱ぐ、

あの女の子として育てられたひと特有の特殊スキルを目にしていたけれど

もういいかなと思って、と言って今はそのまま短パンを脱ぎ去ってからスカートを履くの

で、

それを少しだけ残念に思う

もっとフツワな苗字になりたいからちゃんとケツコンしたいと思ってるんだ、と言うので

まったくのひとごとのようにフウン、と返す

ミヤザキさんは二歳年上のいそがしい社会人のひとと交際しているようなので

日曜日の夜だけはグリーンハイツ・井田、三階角部屋には誰もいない

ミヤザキさんは長女で、一年前におかあさんと喧嘩し続けてしまい

家出をしてきたそうなので学費も家賃もぜんぶひとりで払う羽目になったそうなので

レトルトの中華丼をバックご飯にかけて食べながら、おいしくなーい、とよく言っている

ご機嫌な時はコンビニのカット野菜をパリパリ皿うどんの上に乗せておいしい、と食べている

冷蔵庫はだいたい空っぽで

たまに人からもらったらしい日本酒の瓶が横たわっている

繁柙と書かれたラベルは父親が飲んでいたもののそのものであまりに見覚えのある

それほど暑くない夜はそれをコンビニのロックアイスのカップに注ぎながら河川敷で飲んでいる

ミヤザキさんは強く生きているけれど飲みすぎるとほろほろ泣き上戸になり

扶養の壁なんてとうに越えているのに子どもみたいにもなる

ゴミ出しは行かないといけないので曜日もきちんと守る人なので

ラベルを剥がされたペットボトルがキッチンの背中に整列することになり、それをなんだかわいく思うぼくは

ミヤザキさんがゴミ出しに行く気配を感じて、薄っぺらい灰色の布団の中でもう一度目を瞑る

早朝、イマジナリー・グリーンハイツ・井田

ミヤザキさんが咳をこじらせて気管支炎にかかって一日じゅう寝込んでいるというので一リットルのイオン・ウォーターとその他救援物資を持って行く、グリーンハイツ・井田
そういう周期も重なっていたら大変だろうな、と買っていった鉄分入りの紙パック飲むヨ
ーグルトを見て

さすがに差し入れスキルが高すぎると褒められたので、これからも自信を持って生きていこうと思う

でもまさか今日泊っていくと思わなかったんだけど、なんで、どうしたの、と訊くのでうーん、なんとなく、暇だったから、と言う

ひまつぶし、ってことだ、都合がいいだけじゃん、と言うのであわててそんなことない、と

否定しながら、言い終わるころには気付く

ミヤザキさんはなんとなくぼくの回路が読めるから、それをころころ転がして楽しんでい

る
むずかしいこと言うけど、実は何も考えてないから接しやすんだよね、と言われた日から

飛躍する話題の間に的確な理由を見つけてくるミヤザキさんをぼくはすごいと思っている
夜中、イマジナリー・グリーンハイツ・井田

ひとりじゃなかなか眠れないから添い寝してほしいと言われたので素直にそうしたら
この布団って意外と広いんだねって一個の枕の上で柔らかに笑っていたことがある

しんどそうに激しく咳き込む背中をさすりながらミヤザキさんを寝かしつける

さかさで寝ているので、物干しラックから目の前に白黒サテン生地の手拭と萌黄色の手拭がぶらさがっているのを見ながら寝ることになり、北枕だと思う

お昼になったら、クーラーの風がよく当たる部屋の隅っこに座って本を読もうと思う

もういっそ一緒に住んじゃう？ と冗談で言ったら、家賃半分払ってくれるならわるくないね、と意外に言われたことがあって

二・五万円ぐらいかなあ、さすがに簡単には出せないなあ、と予想していたら一万四千元だそうで

この値段で飼えちゃうのも飼われちゃうのもなんか、お互いさすがにやばいね、ってなつて

なんとなくやむやみになる

雨音を怖がって耳を塞いで縮こまっているミヤザキさんの頭を撫でながら

ここはなんでこんなに寝れるんだろう、と訊くと、わたしがいるからじゃない、と言う

外は大雨、イマジナリー・グリーンハイツ・井田

外に出れない雨なので結局おひるのあいだはずっと寝ている

ミヤザキさんの冷えた身体におおいかぶさると、大型犬みたいだねと言う

さすがに女もののシャンプーすぎる、と笑いながら頭を撫でてくれる

ミヤザキさんは小さな鏡を見ながら器用に前髪を自分で切り揃えてしまう

いきなり短く切ったのに驚いた半年前から色落ちがして茶色になった髪は

今でもゴムを外すとよく結べていたなあってくらい短いことを知っている

魚定食の食べ方がへたくそで、純喫茶のピザトーストが好きなことも知っている

針を刺したら風船みたいにぱちんと割れてしまいそうな鮮やかな胸の張り

おへそを覗き込んだらけっこう暗闇だったので顔をうずめてそつとぼくはミヤザキさんの形を認識する

おならみたいな音がして違うよ、知ってるよ、って笑ったこともおぼえている

関係として起こる快楽を、ぼくはここでぎりぎりど噛み締めている

イマジナリー・グリーンハイツ・井田

夕方には帰るグリーンハイツ・井田

このドア蹴破ろうと思えば蹴破れそうだなってチャイムを押して笑っているけど

もし誰かがほんとうにけやぶってきたらどうしようかと思うとそれが今はいちばんこわい階段をじぐぎぐに下りて、坂を下りて、大学を抜けて、うちに帰る

昔の人が懐中時計を入れていた小さなポケットに貰った丸い合鍵を差し込んで無くさないようにする

ぼくはじょうずに生きていたのでひとりでもぐっすり眠れるけれど

たまに眠れないときはヘッドフォンをしてベランダでお酒の缶を飲んだりもする

三日月の周りに大きな星がたくさん見えると、ミヤザキさんの眼が笑ってるみたいだと思
い

安心して目を瞑り思いを飛ばす、イマジナリー・グリーンハイツ・井田

翌朝目を覚まして外に出あるいてもおそらくミヤザキさんはどこにもいない

グリーンハイツ・井田もたぶんない

ミヤザキさんはみんながぼくの三分の一でも心配してくれればいいのに、とつぶやいてい
た

月みたいに瞳は鏡

ミヤザキさんとぼくは当然のように似ている

ぼくを映すミヤザキさんは現実の断片の総体で

これはフィクショナル、出来事は全部イマジナリーなもので

全然別な現実をぼくはあえてこうして形に残そうとする

足りないものしかないからこうして空想をしてあそぶ

これは現実では決してない、夢落ちでも決してない

繰り返しミヤザキさんは存在しない、この文字の上澄みに影ぐらいはあるかもしれない

また青春18きっぷで東京に行ったら、道中もしくはその行き先で出会えるかもしれない

なくてもいいこの言葉の粒を噛みしめながらどこかでぼくは探している

喉が乾いて痛いから、なんとなく今日も生きているらしい

ぼくがぼくを悼むためで、それは言い訳

誰も傷つけない、自慰行為は気持ちいいから仕方ない

むせ返る生活の匂い、汗の筋

今年もなぞるように、夏

ここはイマジナリー・グリーンハイツ・井田

ミモザマンマクリニックに大変惹かれている。ミモザ、マンマ、クリニック、そこには何があるんだろうと思う。ピンクの看板の乳腺外科。乳腺外科って始めて聞いた。おっぱいをどうするのだろう。その隣の隣の通りに耳の遠いおじいさんがやっている本屋がある。古本と新本がどちらも置いてあって、お客さんの声が聞こえないものだから、おじいさんは取り敢えず、こちら新刊！ 新刊！ と大声を出す。やたら芥川賞を勧めてくる。おじいさんはきつとミモザマンマクリニックを知らない。私は本屋の中で聞こえるくらいの声で呟く。「ミモザマンマクリニック」。

ミとモの間に惹かれている。ミの後にすかさず下唇を上唇に付けなきゃならない。ミもモもマンマも一度唇を閉じないと発音出来ないのだ。この町の名前だって。昔城下町だった名残で町の道は碁盤の目のように格子状になっていて、自転車で走るととっても走り易い。ぐねぐねした道がない。でも、城下町だった名残で狭い通りが多くて一方通行が多い。車だと走りにくい。直進する車があるのに右折をする文化が生まれ、町の名前を冠して「○○曲がり」という。「○」も「○」も「曲がり」も唇を閉じないと発音出来ない。「○」、私は唇を破裂させる。唇が待っている。マと言った唇がすかさず破裂するのを待っている。

ミとモの間にあるのはムメのはずなのに、無名の所なんてない。通りには全て名前が付いていて、皆がその上で横断歩道が変わるのを待っている。青の点滅や、車が全く通らない時でも誰も絶対に渡らない。歩車分離式信号という、歩行者の信号が青になるまでの時間が長い信号が町には多いのに、誰も文句を言わないで待っている。その間に一体何回ほしゃぶんりたいと言えるのだろう、と私は文句を言う。もんく。これだって唇を破裂させる。

ミとモの間で皆何かを待っている。何を待っているのだろう。女鳥羽川という川が流れていて、城を建てる時に人の手で曲げられたのだという。「めとばがわがまげられた」。町の至るところに水路と湧水があつて国の名水と呼ばれ、その何処かにニジマスが住んでいるという。信号待ちの間に探しても私はニジマスを見つけれなかったけれども、きつとこの町の人達には見つけられる。もうずっと信号を待っているからだ。

ナベリンファーマシーにもとても惹かれている。ミモザマンマクリニックから一番近い調剤薬局で、ミモザマンマクリニックで診察が終わった人達は皆ナベリンファーマシーの

入り口に吸い込まれるはずである。ファーマシーは薬局という意味で、そういえば思っ
て乳腺外科のことを調べたらマンモグラフィで乳房のしこりを調べるところらしい。マ
ンモグラフィ。マンモスみたいだと思って、私はマンモスみたいなユートピア美容室の
ことを思い出す。レトロな看板にレトロな内装の店主は後期高齢者のマシンガントークの
マダムで、前髪を切ってあとは伸ばしてと言うのを全無視して10cmも切られた。町に
は美容室が一番多くて、でもお洒落をしてもイオンしか遊ぶ場所がない。町は廃れている。
けれども皆何処にも行かずに、静かに何かを待っている。何をだろう？ マダムに聞いて
も美容室が多い理由はわからなかった。

「ミモザマンマクリニックスのことを知っていますか。」アタシは娘を一人で育てて先週
ボーイフレンドと山登りに行って、この町では車がないと生きていけないわよ。マツダの
マークの。店まではママチャリで来ました。そう。もう少ししたら車買えたら良いわね。
ようこそ〇〇へ。

マンモグラフィは乳房を板で薄く挟んで撮影します。私はこのマダムならマンモグラフィ
イーくらい経験がありそうだと思うけれど、マシンガントークに邪魔されて口の中でマン
モスと一緒にモグつかせる。マンモグラフィ。ユートピア。理想郷。

もうすぐパルコは潰れるけれども、ミモザマンマクリニックスは待っている。ナベリンフ
ァーマシーは待っている。イオンがあって名水があってニジマスが待っている。破裂する
のを待っている。大雨で女鳥羽川が決壊して町が浸水した。中町と餌差町と博労町が火事
で焼けて、中町通りのなまこ壁が出来た。なまこかべ。そう呟く唇は破裂するけれども町
の人たちはずっと待っている。ということとはつまり何処にも行かないで、電車は一時間に
一本しかないし誰も乗らない。この町で生きるのには車がマスト、一方通行ばかりで曲が
り道も回り道もしなければいけない。そうして待っている。誰ももんく、を言わずに、破
裂させずに待っている。壊されるはずだったけれども市民が守ったお陰で、町の真ん中に
は〇〇城が今もなお建っている。〇〇。唇が待っている。壊さない、この町の人達は皆優
しい。町のおっぱいである城に私がまだ行ったことがないと言っても、きっと誰も怒らな
い。もしも耳の遠いおじいさんの耳元で私が呟いても、だろうか？ 町が破裂する。あそ
こにはよく行くんですけどね。ミモザマンマクリニックス。

ミモザマンマクリニックスの隣の隣の通りの本屋には二階があって、そこで夜おじいさん
がモグモグしているのが窓から見える。私はあれがおじいさんの居城なのだと知り、明日
入って来る新刊をわざと耳の遠いおじいさんの本屋に行って買うのを決める。おじいさん
はまたどうぞ！ と毎回大声で言うのも忘れず、私は町の皆と一緒に、田舎だから新刊が
発売日から遅れて入るのを、破裂させずに、心から待っている。

産まれてくるとき

濱田湧壮

出産とは殺人である

という言説がテレビで流れている

母が 違うのにね と言う

限りあるいのちを与えたのにね

僕は そうだよね と言う

僕は詩を書いているのだ

母について書いていて

これを読んだら母は

深く傷つく

僕はそれを確信している

置物のような暗いシワを顔に貼り付け

昔 僕のものだった部屋で母は眠る

棚にはフランス人女性についての本や

宗教じみたパッケージの加湿器や

小学生の僕が書いた短い手紙が並び

いま顔のシワについて書くだけで

母は腰を抜かしてしまう

最近 腰を悪くしてしまったのは

たぶんそのせいだと思う

兄はちゃんと切り分けて考えていて

僕にビンタをする

そのあとで

ビンタをする と言う

これは同じ事じゃないだろ

僕は そうだよね と言う

僕には昔 眠るときに

おはようという癖があった

そうしないと怖くて

眠れなかったのだ
そのせいで家族は
毎晩うんざりしていたし

泊りに来た友達の

眠りを妨げてしまったこともある
笑いすぎて眠れなくなった友達は
理解できない　と言ひ

いまでもその話を蒸し返す

自分の恐怖を押し広げて

ひとの恐怖を推しはかると

僕は殺人鬼にならなければならない

「僕は殺人鬼だ」

「殺人鬼は包丁を持っている」

「包丁を持ったまま書店で働いている」

「僕はもう三年以上書店員だ」

カウンター脇で本の発注をしていると　子連れの男性が声をかけてくる　息子が料理をし
てみたいと言うんですが　簡単な本はありますか　子どもは小学校中学年くらいの大人し
そうな男の子　この本なんてどうでしょう　お子さん向けに作られているので　ふりがな
が多くて説明も丁寧です

男性はその本を買う

僕は本を紙袋に入れて渡す

そのときこっそり包丁も入れておく

家に帰ってから子どもは

本と一緒に包丁を取り出す

嬉しそうな顔をする

その包丁で玉ねぎを切り　にんじんを切り　じゃがいもを切り　牛肉を切る

そして指を切る

痛っ

という僕の声に

母が血相を変える

指先から細く血が流れ

野菜や肉やまな板にシミをつくっている

包丁を奪い取られる

やっぱり早かったね

料理はまた今度ね

母は僕の指に絆創膏を貼ると

野菜を捨て調理器具を洗いだす

僕は ごめんなさい と言う

ごめんなさい と書く

ごめんなさい と思う

兄が 違うだろ という

お前の指は切れていない

僕の指は切れていない

切れたふりをしている

切れたふりをしている

ひとりは嫌だった

母のお腹のなか

「指切りげんまん」

小指を差し出す

消息

菊地もね

名前を持つ日には

折り紙のように清潔な化粧を

加減がわからないから二回手を洗って

指紋が流れた指ですくうコンタクトレンズ

鏡をのぞいて虹彩にかざせば

顔の傷跡や歪みが立ちあがってくる

自転車のブレーキに思い知らされた不注意

回復を待つこともできない短気のしるしで

ここに息づいた私を感じる

過去と習慣が読めてしまう皮膚には

ぺかぺかの匂いがする塗りものとか

やけに特徴づけられた現在で折りあいをつけていく

つやも新しさもわずらわしいけど

いまだけを生きる顔のことも気に入っているから

夕方にはしぼみくずれるこの表情で

いつも名前をかまえている

走っていく批評ならどうでもよかった

かたががあればつねに形容詞をあてがわれ

関係の近い遠いを噂される

私はどこへ連れて行かれるのか

いつそのこと

ひとつがいくつかの名前に化ける

かき氷のシロップにまぎれてしまえばいい

顔も呼ばれ方もその場かぎりの地点

結んだりほどいたり

カーテンの布地に焦点が合うまで待っていい朝
壁とベッドのすきまに落ちている携帯と

すべての視力を寝かせたまま外へ
試しにポケットを裏がえしてみる
今日は何も持っていないようだった
呼ばれないし期待されない
何にも近くない日にはちようどよかった
一人ひとりの歩みが散らばる大通り
パンプスの留め具がはずれて
足を持ちあげるたびに顔を出すかかとか
靴もアスファルトも踏みつけてあざやかに痛む
広がっている髪をぐさぐさとまとめれば
うまく見放されていく気がした
でもいまと距離を置くのだとして
私はどこへ帰っていくのか
のびていく影を頼りに
自分なりの呼吸をつかもうとする
ふだん投げかけられている矢印たちが
すっかり消え失せる瞬間を目がけて

悲しみ記号

奥山紗英

悲しくなってきた、

と言ってみる

パジャマのまま車を走らせる

車に昨日の雨がついている

悲しみの雨だ、

と思う

シフトレバーがぶるぶる震えている

悲しみレバーだ、

と思う

向かい側から走ってくる車が青だ

悲しみの車だ、

と思う

照葉樹林の木々が少しずつ葉を落としている

悲しみを隠している、

と思う

名前の分からない草で茂みが作られている

お互いに名前を知らなくて悲しい、

と思う 名前の分からない茂みから茶色いボールが飛び出した。ブレーキを慌てて踏んだが間に合わなかった。早朝のあぜ道に車を止めて、ドアを開けて降りた。茶色いたぬきが倒れていて、私はその歯並びを見ていた。たぬきは無理やりに起き上がり、足を引きずって茂みの中へと消えていった。

ブランコを漕いでみあげると視界が、あの映画の長回しのようだと、姉たちに言われてから空がスクリーンになったわたしのまわりで直列につらなって浮ぶ蜻蛉。ともに上下してともなつて、彼らのみる複数の宇宙も上下するのだがジュラ期でもそうだったか。碧い影の水平方向に、揺れて白飛びする草叢へぬけていく様子を姉たちの複眼も捉える

わたしたちから、生まれずにすんだものの群れが音もなく高速に水を分け、黍畑を分け、薄曇りの空へと沈んでいくすでに雨は止んでいる、針葉樹のふしくれだった枝・白い葉先を撫でて、その温かさがさびしい、蜻蛉たちの、宇宙液晶の向こうでベトナム人が I meet blue crabs in a graveyard と呟いてる、と姉たちは口々に耳うつけどどうでもよくてむしろ半透明の彼女たちの、肢体の高温高熱でひかり輝くのがあのときの焼き場を思い起こさせるので、つらかった

すれちがい手がふれたあとのようにかすかに、燃える、わたしたちの群れ、姉の群れ。雲からのびる指。輝きだす睫東京を歩くと、一秒ごとに巨きい写真の瘡蓋が迫ってきてわたしをやわらかく包んでいく。かつて姉たちは臍のない腹のようなかたちをした岩に跨り、世界には層があるのとわたしに語った、眠っているような顔で。それがなつかしく河原へおりと鳥たちは飛びたつ。腹や頭が夕暮に白く浮ぶ。そこから垂線をおろすと、姉たちが口を開けている

*都留文科大学

自分の影が美しく見えたのは、コンクリートの地面じゃなくなったから。整備のされていない地面を歩く行為が愛おしく思えてしまう放課後の雑談。私にとってのレッドカーペツトは、目紛しく移り変わる世界の遠心力から解放された墮落的生活の一端であり、それを闊歩することが私の人生の最大の意義の様に思えてしまう。中心を覗けば厭世的台風の目が存在しているようで、私は酷く失望する。かつて自分はこんな空気の悪い場所にいたのかと、消し去りたい過去は置いてけぼりになっていたね。ようやく気付いた罪はしあわせを噛み締めることで救われる。関係性のニューロンを切る行為に鳥瞰できなくなったのは階段を降りたから。階段を降りた先は整備がされていないんです。オブジェクティブに世界切り取れなくて、これはうれしいことなんだけれどね、と一言。他人の不幸は私にとっての不幸であって、全然蜜の味なんかじゃない。眼前に裁縫針を突きつけられるような恐怖、感じてしまうの。かつてすべてを失うことで生を証明する哲学者がいたらしい。そしてその行為に感動して実践する私がいたらしい。幽霊が怖いから心霊スポットに行くような行為です。背後から刺したいね。

それは季節通りに莊嚴に巡行する無色服の王
虚弱で散漫な者に警戒的な死をもたらす

その晩夏の夜に訪れた集中豪雨は

旧城下町の国道を瞬く間に支配する

凹凸に満ちた車道は延々と続く海と島々

タイヤに水飛沫の翼を生やす車という鳥は

その上を通り闇の奥へ飛び去らざるを得ない

僅かに並ぶ飲食店で寛いでいた客たちは

帰宅の嫌気と団欒の喜びを感じもうしばらくの籠城と決め込む

彼らが巨大な権力者の下で富む貴族ならば

視界の狭さ故に足元しか見えないまま

小さな傘に身を隠し一人家路を急ぐあの男は

まるで自分以外に目を向ける余裕のない小市民

これは全て集中豪雨という王の命によるもの

彼の様に孤独に歩み続ける者は他者や社会

そして上を気にすることなく自分だけの生活を送り続ける

彼らは雨の正体を暴くことは出来ない

何故ならその服は無色であるからだ

様々な色を持つ市民たちと比較されることなく

ただ全てを絶対的に見下ろし続ける色

故に雨の支配は永遠に続く

そして雨は正体を感じ付かれないように

次の見せしめにあの男を選ぶ

少し雨の勢いが弱まったために

彼は傘を下ろしそれを垣間見てしまったのだ

少し緑がかった夜空とそれを囲む黒色の雲

すなわち王の御姿を

だが彼は足元から目を離したために
躓き、海に身を投げ、鳥に啄まれる

それは季節通りに莊嚴に巡行する無色服の王
虚弱で散漫な者に警戒的な死をもたらす

ハンカチを持ち歩かない淑女

生野来実

規則正しいリズムでは会えない人

私が夜中のトイレに行けば 洗面所でコンタクトをつけ、髭を剃っている

私が夜更かししようと特番のCMを眺めれば スーツを脱いで母の料理を食べている
父

かろうじて存在を忘れられずにいたのは

皮脂の臭いと煙草のヤニが染みた部屋に落ちている大量の毛髪と

気の抜けたエアーマットの凹み、

ゴミのように散らばっている物たちのおかげだ

リビングの机、母と寝ている布団、子ども部屋の引き出し、小学校のロッカー、
公園の遊具の影、スーパーのカート置き場にもない

扉を開けた父の部屋にしかない物たちに囲まれる日曜日

黄色い壁に沿って積まれた コナンくんが描かれているマガジンの表紙
ヤスリのような紙に指の水分を舐められながら捲る

文字で埋められた吹き出しはQRコードのようで、漢字ばかり

変顔かと思えば殺人現場

ジェンガが崩れる音に首を振り、引き抜いた一冊を頂上へ返した

ウォークインクローゼットにかけられているネクタイたちに問う

ピンク色でハート柄のネクタイはないのか

父は青色か黒色のストライプ模様が好きなのか

首に巻くのは危ないので 布が落ちないように先だけを摘むと

帽子についた交通安全バッチに似ているような

萎んだ風船に似ているような

しばらく触っていた気がした

勝手に落ちかけていたスーツは 両手に広げても余るほどの袖先が垂れていて
爪先立ちで床の砂埃に触れないように スーツを堂々とした姿勢に戻した

ポケットは三つだけ空気を含んでいた
財布と携帯、煙草とライターが入っていたのかもしれない
隠しポケットはいくつあったか
もう思い出せないが

大学の入学式に着たスーツは就職中でも使えるらしい

私は店員に嘘をつかれている

ポケットが少ないし、胸も布の余裕がなくて苦しい、靴底に傾斜があるせいで
二センチも小さなサイズでないと脱げてしまう

これでどう仕事するのだろう

当店にネクタイの取り扱いはありませんとでも言うように

フリル付きのブラウスを紹介された

書類を読む時は猫背になればいいのだろうか

私は買ってもらはずだったスカートの試着をやめてパンツを選んだ

気をつけの姿勢でも鳩の胸のようにバランスの悪い立ち姿の写真

幸いにも踵の血に塗れた靴は写らなかった

もしスカートを選んでいたら式場までの道中に

爪先の痛みで膝を曲げることさえできなかっただろう

式場に並ぶ 二十センチも背の高い人に合わせてつくられたパイプ椅子

それしもなく 私は大人しく座っているフリをした

足裏が床に届かず 壇上を影に覆い隠され 座れば居ないもののようにされる

私

隣人は知らないだろう

起立の合図に揃えるために 私は空気椅子で閉式を待っていた

満開の桜を見上げることもせず

小高いコンクリ塀に肩を預け、鼻筋の脂汗を人差し指ですくうと

こめかみを生垣の小さな葉につつかれ、撫でられ、招かれるまま

私は野ざらしの茶色いベンチに沈んでいった

息苦しいジャケットの、腕より長い袖を枕にして

砂利に真新しいパンプスの底をすべらせ

ジャングルジムの牢獄に母趾球の腫れを見せつけければ

踵の表皮が 赤黒く、湿る中敷へ 生ハムの薄さにおろされた

浜辺の桜貝を集めるように 風に散る花弁たちを目で追いかけてゆく
あれは嘘

卒業後の私はこの拘束着を毎日着ているか

嘘でなければ 私はいつまで他人事のフリを続けるのか

灰色の声

浅岡美月

やりたかったことを左耳から押し流す
午前三時が瞼の裏を乾かして
生乾きの髪が背骨の熱を奪う
暗闇の視線に心拍音が乱れる
硬質な痛みを
ひんやりしたタオルケットで抱えて
喉の熱で呼吸音をおさえつける
重力に裏切られ
あずけたはずの腕が肩に吊られている
鼻からゆるやかに世界を取り込んで
遠い空に触れた言葉が
鼓膜の奥であたたかく絡まる
何も成していないことになってしまう
声のなり損ないが波になって
忘れられずに眠りに落ちる
横隔膜に溜まる感情を
唾液の甘みで正せたことにして
気道に毛布のほこりが貼りつくのも
もう半分くらいで新しくなくなる

夏の記憶

岩花陸

蝉が鳴いている

警笛は聴こえず

ホーム一面に咲き乱れた赤

命色の彼岸花の園へ

その中に佇む安楽椅子へ

そっと腰掛けて声を待つ

錆びついた駅

色褪せた青写真

台風は進路を変えたらしい

嫌味に澄んだ空だけが、ただ

その色を未だ残している

線路を満たす水面へ

気まぐれに視線を落とす

反射した太陽と月

その中を泳ぐ金魚の群れ

桜の花びらは水底に沈み

絵の具になったようだ

もう詮のないこと

焼けるような日照りだけ明瞭で

他のものなんて全部曖昧で

境界線をあんなに嫌ったのは

他でもない自分だったのに

飛行機雲はどこへ行く

向日葵はどこを目指す

虹はどこから生まれる

答えははぐらかして隠した

頬を撫でる風が生温い
蛇口をひねれば癒せる乾きが
何となく愛しくて手放せない
早起きな陽射しのむせる温度が
何となく嫌いになりきれない
思い出にはまだ惜しい
月が綺麗ですねと言うには、少し
太陽が眩し過ぎる季節だ

「間もなく列車が参ります」
進まなくては進めない

車窓を時間が通り過ぎた
揺れる車内が心音と重なる
この軋みもまた心地いい
蜃気楼の街の帳
或いは微睡む記憶の箱庭
霞む視界の向こう岸に
淡い季節が漂っていた
咲かずに枯れた青い蕾に
踏切の音は
まだ、遠く

銀行とコンビニの近くに薬局が建っている
紅白の看板に頭文字がVで何かと縁起がよい
昭和アニメみたいだと思ふなか、わたしの足下で床が過ぎていく
正方形に焼けた陶土の白さは汚れを知らない
それに押し上げられている陳列棚も同じだ
着飾り装い、見栄を張っている
でも

内に並べられた商品たちは違うだろう
彼らは知っている

自分たちを作った胎盤と、揺れる結合
そこにある、触れられない正の裏側を
軽視がツルを巻き

あるべきものはなおざりで

蔑視に抵抗のない

必要だからと許されてしまった質量を
極彩のタトゥーを染み込ませて、整形外科に頼っても
背中の遠くは変わらない

振り返ってみたら

彼らと床と棚に違いなんてなかった

言ってしまうば、私たちとも離れていない
生み出され、世界でのかたちを与えられて
そしてその内側を知っている

だから本当は白じゃなくてグレー

懐かしいね、と尊ぶ心

私たちは、同じ古い均衡に沈む

選ばれし一本

志水風香

ベッドの骨の冷たさを感じた

チリチリと鈴の音を耳に残す

ミモザの匂いが消える前に堕ちた

悪い肝臓のムズムズが走る

ホルモンを焦がす黒ひげに会いたい

開いた瞳孔を閉じられる四角で残像を残すけど

眠気にからかわれた

押し寄せるシルクで泳ぐ頬 太ももの下に隠れる手のひら

逃げる熱と追い出す身体

水の下には常夏の熊がいた

短い線が遠く感じて 赤いアンテナが立つ

起こすのは警報ではなく雷だった

裏返した雲に甘えれば新品が見える

大学最寄りの改札を出る

名状しがたい色の野菜たちが列を成し

じりじりと前進している

踏切越しの対岸

コンビニと畑と田んぼ沿いに

彼らはそこからひとりでに抜け出し

ひとつまたひとつ校舎へと続く列に交じっていく

それを横目に、一人分ばかり空いた左側を

はや歩きでかけ抜けた。

社会で生きていると

前に倣えを求められる

なんとなく同じにくられる苦痛

けど自意識の欠けたこの群れたちには

快感にでも映っているのかも知れない

でも偶に少し列から飛び出ているやつもいるから

肩を振って躲す

彼らは脆いから、すぐに欠けてしまうのだ

私がどれだけ早く歩こうとも

彼らはペースを崩すことなく

信号が点滅しても、クラクションに急かされても

けして小走りにはならず

いまかいまかと自分の番を待っている

先頭にたどり着いたところで振り返れば

校門に置かれた大きめの鍋に雑に放り込まれ

ぐるぐると煮溶かされる

色は完全には混ざり合うことなく

細い短冊状の蜷局を捲いて

渦の中心へ進み続けている

ぼくはあることを思い出したから、食堂に駆け込む

注文は平皿の白米と福神漬、占めて150円

右回転に溶け切ったはずの彼らは急いで逆回転
ようやく気付いたみたい

起床

杉山智哉

帰り道、道端に落ちていたあれは、
誰かが大切にしていた何かに違いなく、
それに目をやる時間を落として、
夕暮れに、燃えたビルを思い出していた。
浅く胡乱だ呼吸を吐き出し、
誰かの手元を見つめながら、
何かを考えている時間が、
私をからっぽにしていく。
気がつけば、思考はただ、
俯瞰した誰かの視点になっていた。
忘れようとしていた人の、
温度のない肌に触れ、
思い出せない記憶の底にある、
色彩を持たない景色を、ただ、
眺めているだけだった。
雨の音も、新しい服も、あの人の顔も、
水面に浮かぶ月も、冬の夜の匂いも、
足りない感情を埋めるために、
補うものを必死に探していた。
胸の奥の奥にある、
小さな塊は、
誰にも取り除けなくて、
気がつけば、
深く憂いた呼吸の波は、
時計の針の動きを真似ていた。

いつのまにやら水中がいて

匂いを程よく含みながら溺れている

肺胞の中には、散り散り光る苔が

そぞりと棲みついて居り

呼吸の、またとないワンツートを

マッチポンプの錆びついた　ごとく

侵略している

太陽のヴェールは、蠟を垂らして時を止めた

ままの姿で

どうだ、輪切りになろう

美しいカルパッチョの肢体のみとなり

みちがえるようにほどかれて

原風景に迂回してゆけたなら

掬ってはほかり、質量を

秤で掬ってはほかり

えてして氾濫する

ヒトにうまれてしまったばかりに

這いあがるさまが　かくも醜いか

熱以外のきっかけをも、またとない犠牲とし

ゆたかに歪むいとなみが

一足飛びの要領で

まことしやかにうつろってゆくのだ

まだ、満ち満ちてゆく隙間がある

じきに麻酔が効くでしょう

あなたはひどくかるく

わたしはぬて、とおもい
純粹な質量の話であったなら
どんなによかったろう

雪の時間

楊楚豪

二十年前

雪が降り積もっていた

私は滑り台の下に立っていた

厚着をした体が、冷気を感じて

両親の笑い声が、家の中で響き渡っていた

滑り台の頂上で、私はただひとつの挑戦を前にしていた

目の前の雪景色が心に積もっていく

雪は白く、広がる空に溶け込んで

私を包み込んでいた

滑り台を滑り降り

風が肌を刺し

雪の上で派手に転んだ

この瞬間が、記憶の中で

生き続ける

百年後を考える

未来の雪はどうなるだろうか

この街が、冷たく、変わらずに残るのか

消えていくのか、誰にもわからない

今、私が立つこの場所も

過去の記憶と未来の夢が交錯する

瞬間の中に埋め込まれた時間の層が

無限に広がって

私を包み

社会の中で私たちが描くこの「瞬間」が

歴史の中で形作られていく
答えはまだ見えない

過去の雪の中で転がる私が
未来の雪の中で転がるのを
この瞬間の中で見つめて

黒

坂田 凧

いつも通りの最寄りのバス停を降りると

そこは暗闇だった

夜の比ではない

何を見ているのか

どこにいるのかもわからない

おそらく田んぼ道であるはずの場所を歩く

たとえ視界を奪われても

この道ならば目を瞑ってても歩けるはずだ

いくら歩をすすめども

なんの景色は見えてこない

孤独へと誘われ

心が痛み侵されてゆく

ここは堤防のあたりだろうか

猫の鳴き声 お隣さんの話声 車の音

聞き慣れた音たちは削り取られたように

奈落へ吞まれていた

割引には割引のやりくちがある

プラスからマイナスを発生させる行為

それはビックバンに近い

半額が定義するのは煽動

九割引は暴動を指す

サイフを痛めても

ぼくらはきつと買うしかない

カラの器が彩るのは感情であつた

感情に値段を付けてしまえば

それは定められたもの

カタチはないから

公正取引委員会も

アメリカも

ヨーロッパなんかも

なんびとも手をだせない禁忌

値段は政府なんかじゃなく

何人も自ら生み出すはずなのに

意志もなく、

ならこの貼られたモノはなにか

そもそも何で出来ている

完成済みかすら、知らされず

旬の時期が終わるのを待つのか

夏の次は秋というが

四季のある国は少ない

海辺に近ければ腐るのも早い

腐ったら土になる

土にはなんの意志もない

だからか

ぼくが今スーパーに立っているのは

蛍の光がみえて

店員がコッチにきた